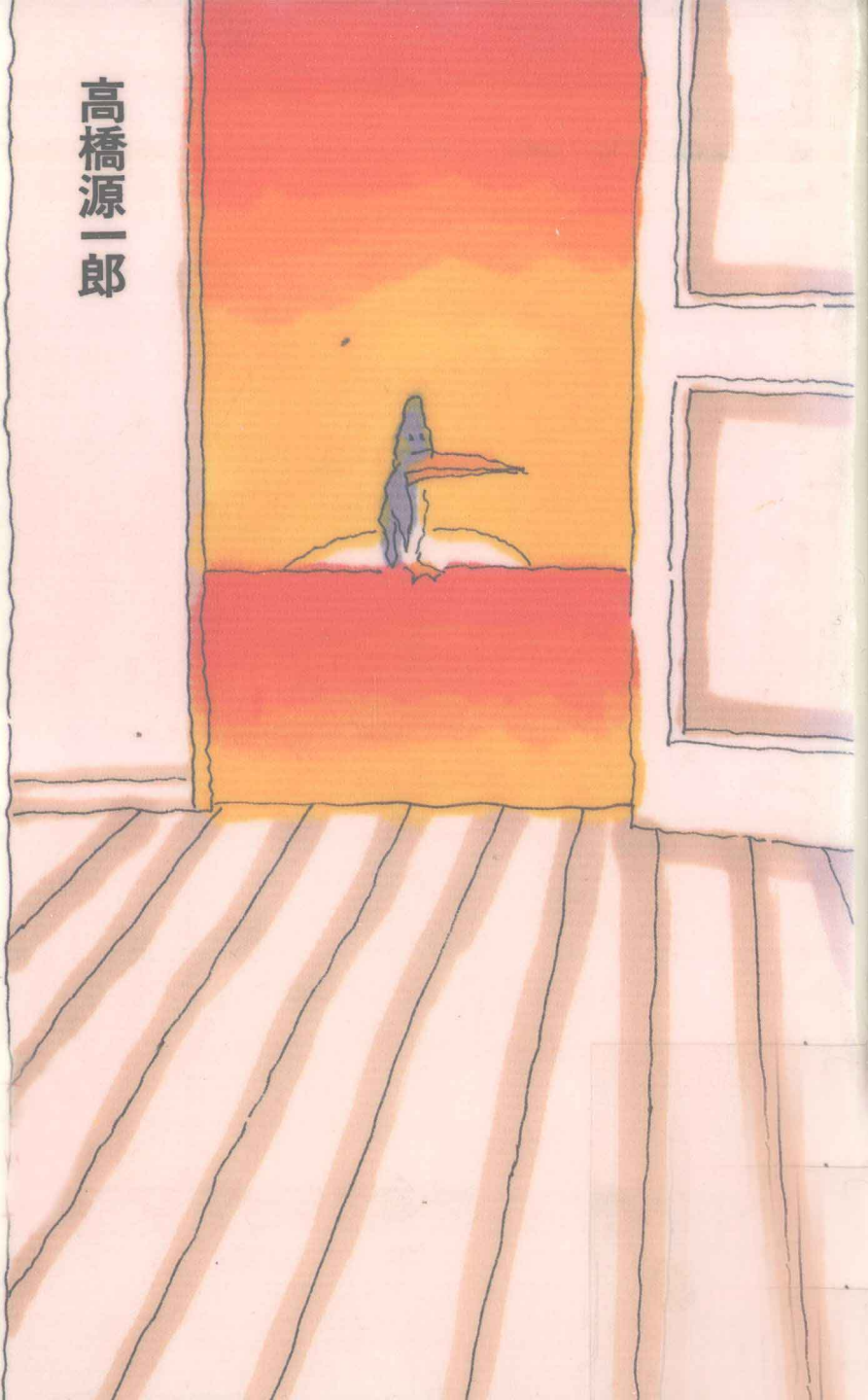
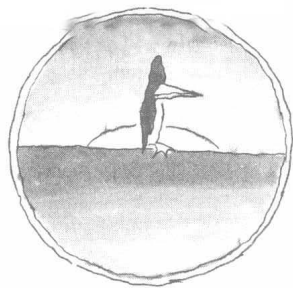


ペンギン村に陽は落ちて

高橋源一郎



ペンギン村に陽は落ちて



集英社

ペンギン村に陽は落ちて

一九八九年一月一日 第一刷発行
一九九〇年一月二三日 第五刷発行

著者 高橋源一郎
たかはしげんいちろう

発行者 若菜正

発行所 株式会社集英社

〒三三〇 東京都千代田区一ツ橋二一五―一〇

出版部 (〇三)二三〇―六一〇〇

販売部 (〇三)二三〇―六三九三

製作課 (〇三)二三〇―六〇八〇

印刷所 図書印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えいたします。本書の一部あるいは全部を無断で複写・複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

©1989 G.Takahashi, Printed in Japan
ISBN4-08-772714-9 C0093

目次

序文……………	5
ペンギン村に陽は落ちて―前編……………	41
愛と哀しみのサザエさん……………	75
いつか同時代カンガル―になる日まで……………	111
キン肉マン対ケンシロウ……………	153
連続テレビ小説ドラえもん……………	181
ペンギン村に陽は落ちて―後編……………	207

装帧

古川
タク

ペンギン村に陽は落ちて

序 文

「ほく、『しょうせつ』を書かなくちゃいけないの」息子はそう言いました。

「すごい」わたしは言いました。

「それは立派なことだ」

「その件について相談にのってもらいたいんだけど」

「オーケー」

わたしと息子はテーブルをはさみ、向かい合って座りました。

「マリ子先生が宿題の『ていあん』をして、そしたらヨシオくんが『しょうせつ』を書こうって言いだして、それでぼくたちは夏休みの間に『しょうせつ』を書かなくちゃいけないなっちゃったんだ」

「それは『相談』ではない」わたしは言いました。

「それは、きみの生活の『報告』だ。『相談』ではない。『相談』があるといったんじやないのかい？」

「ごめんなさい」

「もう一度言い直さない」

「ぼく、『しょうせつ』の書き方をあなたに教えてもらいたいの」

「なぜ、わたしがきみに教えなければならんのかね」

「だって、それはあなたが『しょうせつ』家だからだよ、パパ」

「きみのマリ子先生は、きみに『しょうせつ』の書き方を教えてくれないのかね？」

「『しょうせつ』は自由に書くものだから教えられないんだって」

「それできみはわたしに『相談』をもちかけたってわけだな？」

「そうだよ」

「しかしだね」わたしは言いました。

「きみのクラスの生徒が34人いるとしよう」

「ほんとうは35人だよ」

息子はわたしの誤りを訂正して言いました。

「ナガイクニヒコくんはジヘイショーですつと休んでいるけど、ちゃんと席はあるんだから」

「オーケー。35人いるとしよう。その中に、パパが『しょうせつ』を書いている生徒は何人いるのだろう」

「ぼくひとりだと思っよ、パパ」

「すると、きみ以外の34人は自分のパパに相談できないわけだ」

「でも、ヒロキくんのママとユカちゃんのママは『しょうせつ』の学校へ行ってるよ」

「残りの32人は？」

「わからない。もしかしたら、おじいさんかおばさんか隣のおねえさんが『しょうせつ』の学校へ行ってるかもしれない」

「確かに、その可能性も考えられる」わたしは感心したように言いました。

「ではきみのクラスの中で6人は『しょうせつ』の書き方を相談できる相手がいるとして、残りの29人は自分で考えなければならぬわけだ」

「ナガイクニヒコくんはジヘイショーだから宿題をやらなくてもいいんだよ」

「28人！」わたしは大きい声で言った。

「28人は、どくりよくで『しょうせつ』を書いてくるわけだ」

「まあね」

「きみも、他の28人と同じように、どくりよくで『しょうせつ』を書いてもいいわけだ」

「まあね」


「では、なぜ、わたしに相談するのかね」

「それはもちろん、いい『しょうせつ』を書きたいからだよ」

「いい、『しょうせつ』！」わたしは髪に両手をつっこむと、おおげさにかきむしりました。

「いったいどういう『しょうせつ』がいい、『しょうせつ』なんだね」

「きまつてるさ。いい『しょうせつ』というのは、マリ子先生が『よくできました』と

言つて花マーク  を描いてくれて、それでみんなにほめられるような『しょうせつ』だよ」

「なるほど」わたしは少し考えてから言いました。

「わたしの考えているいい、『しようせつ』と、きみのマリ子先生が考えているいい、『しようせつ』とがちがっているとしたらどうするんだね」

「わからないよ」

「ではこうしよう」わたしは言いました。

「わたしはきみに、わたしが考えるいい、『しようせつ』の書き方を教えてあげよう。そして、きみの書いた『しようせつ』にわたしのマークをつけて採点してあげよう。ただし、わたしがいい、『しようせつ』だと思っても、それでマリ子先生の花マークがもらえるかどうかはわからんが。どうだね」

「あなたのマークをもらうとどうなるの？ 点がいいとみんなにほめてもらえる？」

「保証はできん。なにしろ、わたしのしゅかんのマークだから」

息子は少しガツカリしたようでした。

「わかったよ。なんにも教わんないよりはましだから」

「そうとも」

わたしは机の引出しの中からスタンプを1個とり出して、新聞の広告の白い部分にペタリと押ししました。



「一匹では『もうすこしががんばりましょう』だ」



「二匹では『ふつう』だ」



「三匹では『よくできました』だ」

スタンプを押し終わると、わたしは息子を見ました。

「パパのこのマークは気にいったかね？」

「もちろん！」 息子は言いました。

「大満足だよ」

「さて」 わたしは言いました。

「『しよせつ』を書くやり方だが、きみはどんなやり方があると思うかね」

息子はうでぐみをするを目を閉じました。考えるふりをしているのです。

「あなたのやり方を真似てみるのがいいと思う。わからない時には先生のやる通りにやってみなさい、ってマリ子先生が言っているから」

「なるほど」 わたしは考え深げに言いました。

「それは上等なやり方だ」

息子はさっそくわたしの真似をしてみました。わたしの真似というのは、まずお昼の2時まで布団から出てこないことでした。だが、息子は10時頃になると、うんざりした

表情で布団から這い出してきました。

「パパ。あなたの真似をするのはとてもむずかしいよ。からだがムズムズして、ぼくはとても2時までがまんしてられない」

「起きる時間の問題ではない」わたしは布団にもぐりこんだまま言いました。

「重要なことは、睡眠が充分とれているかどうかということなのだ」

わたしから許可をもらうことができたので息子は布団から飛び起きました。次に息子がやってみたのは、新聞を隅から隅まで何回も読むことでした。だが、息子は『フジ三太郎』を読み終えると、後は読むところがないので困ってしまいました。

「ぜんぶ読まなくちゃ、いい『しょうせつ』を書けない？」

「そんなことはない」わたしは言いました。

「わたしはわたしの好奇心にしたがって新聞を読んでいるだけなのだ。きみはきみの好きなものを読めばいい」

そういうわけで、息子は『少年ジャンプ』をつづけて3回読みました。その次に、息子がやったのは、わたしと並んで腹ばいになったまま夜中までテレビを見つづけること